

# 舞草（モグサ）の語源について

ーギリシャ神話と日本の神話を関連させてー

東京都町田市 菅原鉄孝

## 舞草（モグサ）の語源

舞草（もぐさ）の語源は星座に由来していると考えられる。ギリシャ神話に登場するペガス（天馬）に乗ったペルセウスと呼ばれる騎士が持っている髪の毛一本一本が蛇の Medusa（メドゥサ）のことであろう。メドゥサはペルセウスの剣によって斬られた首である（写真参照）。

メドゥサににらまれると石になるといわれてしまう、という魔力を持つているので有名である。語源では、「無意識の力」を意味している。

このメドゥサの発音をギリシャで聞くと「モグサ」に聞こえるが、日本人が最初にこの発音を聞いて「舞草」と表記したのは名訳である。発音は「メドゥーサ」や「メドゥサ」でもなく、「舞草（モグサ）」と発音するとギリシャ人でも直ぐに理解してくれる。



メドゥサ石像

この「モグサ」の由来を本稿で紹介し、「舞草」の語源として定着させたい。しかし、研究は始まったばかりで、更に東北での刀匠と蛇を祀った神社との関係などを詳細に実地調査する必要のあることは言うまでもない。

ギリシャ神話と日本の神話を比較すると、共通する部分が少ない。アテナ神をアマテラス神に、ペルセウスをスサノオに当てはめると、八つの頭を持つ「八岐オロチ」は「メドゥサ」に該当することがほぼ推理される。岩戸に閉じ込められる話には、メドゥサに睨まれて石になったことを意味するのではないか。

そのメドゥサがなぜ人名や地名になったのか、時代はいつか、刀剣との関わりはどうか、となると更なる研究が必要である。筆者の記憶には、宗近に関係する神社に蛇が祀られていたことが忘れられないのである。

コーカサスのアリーのガサン（天国の意）や、バルカリアンの女性神ヒミキが、何故、日本に伝わっているのか。ガサンは現在コーカサスでは人名となっているが、そのガ

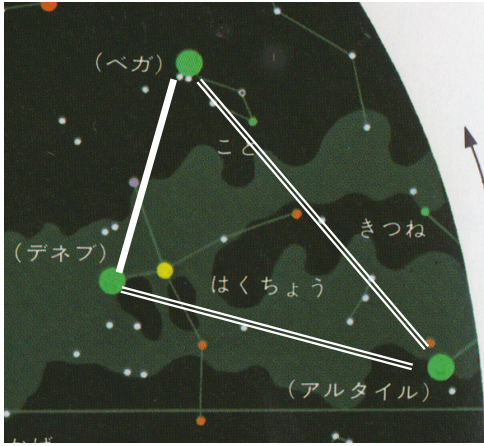
サンが五家伝の技術を有する刀剣鍛冶として日本に移住したのはいつ頃だろうか。メドウサはスキタイの一つの神様でもあるが、スキタイのメドウサはギリシャのメドウサと少し異なり、日本の八岐大蛇に酷似している。スキタイが何故日本に渡来したのか、スキタイではなくバルカリアン（アーンヤンの子孫）ではないのか、といった具合に疑問がどんどん増える。特に舞草とバルカリアン、スキタイの関係は非常に興味ある課題である。

モグサ（メドウサ）の由来を研究すると、世界中の宗教の発生の由来にたどり着き、その思想の壮大さには驚かされる。世界地図を広げてこの論文を検証していただきたいと思う。

### 世界の三大聖地と星座〈夏の大三角形〉

世界の三大聖地（アルタイ山脈、コーカサス山脈、ヒマラヤ山脈）は〈シヤンバラ〉（地下世界、黄泉の国、天国）で結ばれていて（次頁イラスト参照）、それは三つの星座によって構成されている。

つまり世界の三大聖地は〈夏の大三角形〉と呼ばれる星座アルタイル（わし座）、デネブ（白鳥座）、ベガ（琴座）の三角形を意味しているのである。



〈夏の大三角形〉星座アルタイル、デネブ、ベガの位置が三角形をなす

〈アルタイル〉はアラビア語で「鷲」の意味である。〈アルタイル〉はアルタイ山脈のペルーハ山、〈デネブ〉はコーカサス山脈のエルブルース、〈ベガ〉はヒマラヤ山脈のカイラスのことであろう。

### 星座〈夏の大三角形〉

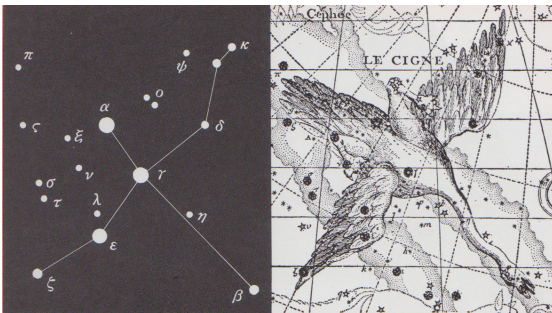
- もう少し詳しく述べると、
- 一、アルタイル（七夕の彦星、牽牛星）鷲座（飛ぶ鷲）
- 二、デネブ（白鳥座のα星）天の川の上に翼を広げ、北から南に向けて飛ぶ形をしている。
- 三、ベガ（琴座のα星ベガ）織姫（落ちる鷲）

世界の宗教は、この三大聖地を中心に発生したと言っても過言ではない。その思想は、当然ながら日本にも及んでいる。

アルタイ山脈周辺ではシヤニズムが発生し、それが南下してシルクロードを横切りチベットを経てインドに流れたと見られる。チベットではチベット仏教（真言密教）が発生し、ヒマラヤ山脈周辺ではヒンドゥー教が発生した。これが〈ベガ座〉である。



アルタイル・わし座



白鳥座 『宇宙と星と観測』P.91の『小学館199年6月20日発行』(17世紀ころのフラムスチード星座図より)

草原ルートを経てコーカサス山脈に至ると、最高峰エルブルース山では神道が発生した。天孫降臨説はここで生まれたのであろう。そこにはギリシャ文化の根元をも存在していると言われる（カフカス考古学研究所）。日本神道はこのエルブルースから渡来したものに間違いはない。

### 原始宗教の発生と伝播

宗教が発生した順路とその概略は、凡そ次のように理解する。

#### 一、シャマニズム（シベリヤ・インド）：

原始的な太陽信仰を中心に、北極星と巨木を結ぶ線を中心に世界が回るという思想や、星座と神話が生まれた、山岳信仰が開始、アニミズム観と輪廻思想をもつ。

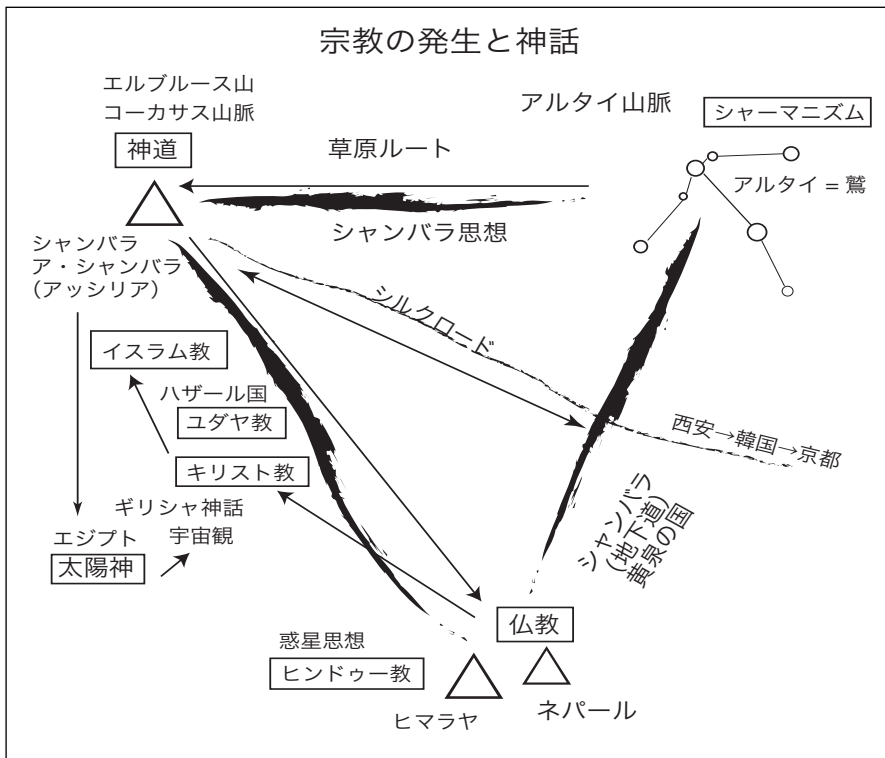
#### 二、神道：シャマニズムを踏襲：星座と神話、自然崇拜、山岳信仰、天孫降臨思想をもつ。カフカスではエルブルース自体をシャンバラと呼ぶ。ガサン（アー



星座を表す石。この石の間から特殊なエネルギーを発する草の生えない場所（女性器）に入る。



アルタイの重要な九つの山が太鼓に入っている事を説明するシャマン



リヤンの信仰する「天国」が人名となった。ヒミキはバルカリアンの女性神、戦争の神様。バルカリアンの神話：月の雫（ミルク）から海が発生。

#### 三、太陽信仰：（エジプトなど）。ピラミッドに二つの星の光を導入

して交合し(星の王子)を誕生(天孫降臨説)。神話の共有は、アーリヤン(子孫バルカリアン) ↓スキタイ ↓アラブ諸国 ↓エジプト ↓アフリカ ↓ギリシャなど広範囲に及ぶ。ギリシャ神話は世界中に伝播。ギリシャ神話では、人間の誕生：大地と海が合体し男女2神が誕生し、そこから人間の祖先が生まれた。

四、チベット仏教：釈迦如来、大日如来信仰。密教的(男女交合)思想。日本では真言密教として普及している。

五、キリスト教：愛。太陽よりも真理が重要であるという思想。

六、イスラム教：ユダヤ教やキリスト教と同様にアブラハムの宗教の系譜に連なる唯一神教。唯一絶対神(アッラーフ)を信仰

七、道教：玄武神(北極星)信仰。インドの宇宙観や四神相応思想が中国に渡来して始まった。平安時代に日本に伝播し、陰陽思想が普及した。

この頃、日本の武士道の根元となった兵法「三略」(前漢時代の始まりに漢の武將に与えられた戦略)が日本にもたらされ、朝廷に使えていた大江家に伝わったようである。後にここから武士道が一般化した。

### 宗教と冶金(金、青銅、鉄)の関係

宗教の発生と冶金、鑄造技術の伝搬経路との関係は、決して無関係ではない。アルタイ山脈のベルーハ、コーカサス山脈のエルブルース、チベットやヒマラヤは世界有数の鉱山である。アルタイは約七種類の鉱物が採取できる。エルブルースは鉄の他にニッケル、クロム、マンガンを採掘されるので、ダマスカス刀発達の元となった。日本の加賀白山神社には、「三種の鉄」という記述が残されているが、意味不明とされている。恐らくニッケル、クロム、モリブデンのことに相違ない。



アルタイ山脈最高峰ベルーハ。世界有数の鉱山である

エルブルース山周辺で発生したアーリヤンの技術(金銀銅鉄)は、エルブルース周辺のバルカリアン・カバルディニアン、スキタイ(Skithai)に伝わり、彼らはエジプトに向かつて南下し、ローマンのバクトリアン Bactrian(トラキアン Trakian、フェニキアン Fenikian)に伝わった。アキナクス青銅剣を最初に鉄器にしたのはスキタイ(Skithai)である。しかし、フェニキアンは交易が巧みであったため、難しいエジプト文字やギリシャ文字などを使わずにローマ字を作り出し交易に使ったので、その交易範囲は広がり地中海周辺を網羅した。例えば、古代エジプト王ファラオがスキタイが自由に管理し始めたシリアのダマスカス港を巡る利権を奪回しようとしたカデシュの戦いでは、フェニキアンの作った鉄剣や戦車等が使われた。ここで使われた鉄器には焼きが施されていた。その製造した場所は現在のスペイン南部のメリダ辺りである。この戦争はなかなか決着がつかず結局和解することとなったと粘土版に記述が残っている。

彼らの冶金技術は古く、ヨーロッパで最古と言われるバクトリアンの金製品出土品は、ブルガリアで出版された資料によると、紀元前五千年に作られたことが説明されている。

このようにバクトリアン(アジア西部の Oxux 川と Hindu Kush 山脈との間にあった古国)(研究社『NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY』参照)の製品は、交易によって広範囲に取引された。おそらく、ヒッタイト帝国が使用した鉄器もバクトリアンの製品であ

ろう。

しかしフエニキアンのみならず、スキタイの交易範囲も広範囲であった。スキタイはダマスカス港から大きな船を漕ぎだしヨーロッパに向かったからである。スキタイが使用した金はチベットで産出された物など、二種類有るらしい（ジエレミー談）。つまり、スキタイはエルブルースからシヤンバラルートを通ってチベット、ネパール、アルタイ山脈を踏破していたと考えられる。日本に渡来したルートは、おそらくシルクロードを経由したのであろう。

従って冶金技術は神話や宗教文化と共にアジア、ヨーロッパ各地に伝わり、シルクロードを経由して中国（殷）に伝わり、朝鮮半島、そして我が国にも到達したのである。

スキタイ自身が日本へやって来た事は十分考えられるが、最も可能性が高いのはアーリヤンの子孫



胴体が八個ある八岐大蛇と同様のスキタイのメドゥサ（メリダ博物館で筆者撮影）



スキタイが交易に使用した船（メリダ博物館で筆者撮影。原画はロシアのエルミターージュ博物館が所蔵）

しかしフエニキアンのみならず、スキタイの交易範囲も広範囲で

バルカリアンである。

バルカリアンとスキタイは、ほぼ同一の文化を共有している。スキタイもメドゥサを信仰していたが、こちらの蛇は元の胴体から七個の胴体が枝分かれしていて、日本の神話に登場する「八岐大蛇」の姿をしている。なぜギリシャと異なるのかその理由は判らない。

朝鮮半島の高句麗は、アーリヤンの末孫であろう。それらの鉄生産技術は農耕民族「新羅」に伝わり、更には「百濟」では中国系文化が合流し、我が国に移入された。この時、ギリシャ神話はかなり誤って日本に伝わったようだ。日本の神話には、星座に関する祭り事（熊祭り、七夕祭りなど）がある。したがって、日本の神社仏閣には幾つかの系統があるが、道教という名称は使われなかった。中国で発展した四神相応の影響を最も受けているのは北向き庚申堂である。白山神社はコーカサス系であろう。このように冶金技術と宗教は一体化しているのである。

### 日本の神話

日本の刀剣に関する神話には、出雲神話に登場する八岐大蛇伝説がある。

神話では、スサノオが高天原の宮中に糞尿をまき散らすなど悪行をした為にアマテラスが怒ってスサノオを追放したが、その悪行を恐れて天の岩戸の中にアマテラスは隠れてしまい、世の中が真っ暗になってしまった。その天の岩戸はタジカラオの力で開けられた。

一方スサノオが放浪中に泣いている夫婦に出会い、その訳を尋ねると毎年、その夫婦の八人の娘を一人ずつ食べにくる八岐大蛇がそろそろやって来る頃なので泣いているという話しを聞き、「その娘（クシナダ姫）と結婚させてくれれば八岐大蛇を退治して上げよう」

ということになり、その親に強い酒を作らせ、やつて来た八岐大蛇に飲ませて酔わせ、眠っている隙に八つ裂きで切り刻んで退治したところ、体内から立派な剣が出て来たので、それをアマテラスに献上した。その剣が後に天皇家の三種の神器の一つになったという粗筋である。

この神話から、出雲地方をタタラ製鉄を始めた原点と考える説もあるが、タタラ製鉄は近世の歴史であつて、それほど大きな製錬炉が神話時代に突如として作られたとは考えにくい。しかし神話には「剣」が出てくるので、小さな炉で製錬を行つて剣を作った可能性は当然考えられる。その技術は一体どうなつてしまつたのであろうか。後世のタタラ製鉄は直接関係しているのであらうか。しかし、後世のタタラ製鉄は、大型化した蒙古軍タタールからの伝播と考えた方がよい。筆者の推定では、日本で製錬が始まつた初期は土器製錬を行い、やがて縦型炉や、箱形タタラ炉へと推移していった筈だ。土器製錬は北海道北部にまで到達した。コーカサス地方での土器を使った鉄製錬は、紀元前一世紀のみであるが、日本ではオホーツク式文化期（三―七世紀頃）まで使われた。

八岐大蛇は退治されてしまい、もうこの世から消え去つてしまつたのではなく、その技術は北上していったのであろう。しかし、出雲地方では土器製錬は長くは続かず、粘土製の炉による砂鉄製錬が行なわれるようになった。



メドゥサの中央の模様が展示されているギリシャ考古学博物館（ドゥサ）

何故なら日本の製鉄の歴史では、秋田県で9世紀頃にはかなり大きな縦型炉に発展していることが解明されているからである。

（一）で神話の論点を上げると、（一）切り刻まれた八岐大蛇から名剣が取り出された、（二）雨の岩戸にアマテラスが隠れてしまつた、（三）スサノオとクシナダ姫との結婚、である。これらの点はほぼギリシャ神話に共通する。

### 日本神話についての理解

筆者は、ギリシャ神話と刀剣製作の技術を持った渡来人が大陸からやつて来て日本の現地人と結婚し、その刀剣を支配者に献上した、と考える。渡来人は星座と神話を日本人に伝えたが現実と混同して一般化してしまつた。そのような仮説を立てると、その渡来人は何らかの理由で更に北上し、東北地方で舞草刀を作り、舞草という地名が生まれ、そこに住む人が舞草姓を名乗つたのではないかと、という仮説をたてるのが可能となる。

では、どのような経路を辿つて日本にやつて来たのであろうか。これを考えると、武器を持った紀元前の渡来人、紀元後の渡来人、製錬技術をもつた渡来人など様々な仮説がでてくるが、蛇信仰と結びつけると、かなりその範囲が狭まつてくるように思われる。

### ギリシャ神話の中のメドゥサ

美しい三人の姉妹ゴルゴネス (Gorgones) がアテナ神に仕えていた。その中の一人はメドサ (Medusa) といひ、アテナ神の巫女であつた。アテナも非常に愛していた。しかし、ホセイドンがメドサを見初めて愛するようになり、神殿で二人がセックスするようになったのでアテナ神が嫉妬し怒つてしまつた。そしてメドサを生きた蛇が髪の毛のように住み着いた頭に変え、醜い顔の女にしてしまつた。メドサは

醜い顔で人を睨みつけるようになったので、皆がメドサを嫌い殺そうとするようになった。しかし、メドサが睨むと睨まれた人は皆な化石になってしまったので、なかなか殺す事ができなかった。

そこでアテナがペルセウスに翼と足に小さな翼を付け早く飛ぶようにし、誰からも姿が見えないように楯を与え、メドサに近づいて殺すように命じた。ペルセウスは盾をつけて身を隠し、見えないようにしてメドサに近づいて剣で首をきった。しかし、その斬った首を兵士に見せたところ兵士全員が化石になってしまった。ペルセウスはメドサの首を持って天上に上がり、ペガサス座になった。

## アンドロメダの神話

小学生の参考書「宇宙／星と観測」(小学館学習百科図鑑 一〇一頁)によると、メドウサについて次のように記述している。

石になった化けクジラ、

カシオペアはエチオピア王ケフェウスのお妃でした。二人の間にはアンドロメダという美しい娘がおりました。カシオペアは大変傲慢で、自分の美しさを鼻にかけ、「海に住むどんな美しい女神でも、私の美しさに、かなうはずがない。」としばっていました。

このことが、海神の耳に入り、海神を怒らせてしまいました。そのため、陸には津波が何回となくおしよせ、海には怪物があげられだして、人々を大変困らせるようになったのです。

驚いたケフェウス王は、神様にお伺いをたてたところ、カシオペアが、海の女神たちを馬鹿にしたからだとわかりました。「海の女神たちをなだめるには、アンドロメダを、海怪物のいけにえにしななければならぬ。」と、神のお告げがありました。

可哀想にアンドロメダ姫は、人々を救うために、海岸の岩にくさりにつながれました。沖からきみの悪い化けクジラが、ガバツガバツ

と波を押し分けて近づいてきました。

ちょうどその時、勇士ペルセウスが空を飛ぶ馬ペガサスに乗って、通りがかりました。

ペルセウスはアルゴス国の王子です。メドウサという化け物退治にでかけ、いま、その帰り道でした。メドウサは髪の毛が一本一本が蛇で、口から火を吹いている、恐ろしい魔女です。その顔を一目でも見たものは、たちまち石にされてしまいます。ペルセウスはかみのように輝く楯を持ち、メドウサの姿を楯に写して退治したのでした。

岩に縛りつけられているアンドロメダ姫を見つけると、ペルセウスは馬からおりました。

化けクジラが姫をひとのみにしようとしたとき、ペルセウスは腰に付けた革袋の中からメドウサの首をとりだし、自分は後ろ向きになって、化けクジラのほうにつき出しました。

メドウサは、死んでも魔力をもっていました。メドウサの首をみた化けクジラは、そのまま石になって、ゴホツゴホツと沈んでしまいました。

こうしてアンドロメダ姫は助かりました。ペルセウスとアンドロメダ姫は結婚し、めでたしめでたしとなったのです。」

## 日本の神話との共通性

ギリシャ神話の原型はアラビア人によって作られ、それがギリシャに入ってきたものである。ギリシャでは多数の神殿が作られ、シヤマニズム的世界観が更に発展し、宇宙の星の動きを観測して正確な時計が作られるようになった。

星座にまつわる話しは、手の届かない天界の神の動向として創作された、いわばおとぎ話であるが、現実的に考えられて神殿と

共に発達して有名になり、世界中に伝播した。日本に伝わった星座にまつわる神話では、夏の大三角形は七夕祭り（天の川の兩岸の織り姫、彦星が出会う日）として一般化している。

出雲神話は、ギリシャ神話と比較すると、神々の名称やストーリーは多少異なっているが、大筋では共通する部分が少なくない。名称を置き換えるとその共通性がでてくる。

アマテラス…アテナス

高天原の宮…アテネ神殿または天界

スサノオ…ヘルセウス

八岐大蛇…メドウサ（モグサ）

八人の娘の一人…アンドロメダ姫

三種の神器の剣…ヘルセウスの剣

ストーリーでは、ギリシャ神話では、神殿の中でセックスを悪行として怒りメドウサを殺すことになるが、日本の神話ではスサノオの糞尿を巻き散らすなどの狼藉をした為に追放したことになる。

### 戦争に使われたメドウサ

アテナはメドウサの顔を盾の中にとり入れて戦争の相手を威嚇するようになった。更に大きな（サムライのチョンマゲ風の）ヘア（ヘリケファレア）を兵士の頭の上に付けて大きな人間だと思わせて相手を威嚇するようになった。これがローマやギリシャ軍の兵士の頭に付けられるようになった。この（チョンマゲ）



メドウサを中央にいた楕（アテナ考古学博物館、筆者撮影）

ヘアは後に十五世紀のユザック兵にも普及した。日本のサムライのチョンマゲも同じ意味を持つていると考えられる。女性兵士のアマゾンも使った。

ギリシャでの聞き取り調査によると、ギリシャ神話はギリシャで始まったのではない。「アテナ」はリビヤからやって来た言葉だが、エジプトやインドの影響も受けているという。「メドウサ」は、サンスクリット語では「メンツウハ」、エジプト語では「マート」というが、ギリシャ語のメドウサの発音が、日本のモグサの発音に最も近い。

ギリシャではシベリヤで発生したシャーマニズム的な宇宙観が現実的な天文学となり、宇宙観察を行うようになった。

シベリヤのシャーマニズムでは、北極星と街の中央に立てた大きな柱を中心に世界が回っていると考えるが、ギリシャにも同じ考えが伝わっている。この柱をインディアと云い、Atacabac（臍）という意味が有るといふ。日本の「アラハバキ」の言葉がここにも表れるのである。

日本の神社には必ず「要石」が置かれているが、大きな柱を立てる大地の中心の意味を持つていると思われる。御柱祭りもそれに似た意味が必ずや有ると思われる。

東北地方の蛇信仰については、まだ詳細を調べていないので、写真や情報が得られれば、逐次紹介していきたいと考えている。

ギリシャ神話では、大地と海が合体し男性と女性を生んだ。その男性と女性が三人のゴルゴネス Gorgones を生んだという。その中の一人がメドウサである。（ブルガリアでは「ゴルゴネ・メドウサ」といふ）。Medusaの意味はクイーン（妃）。その名の語源は medusa（女支配者、女王）である。ゴルゴネスはゴベルノス captain の意味がある。



メドウサは cunning, crafty, wily, artful の意味もあり、無意識の力を意味してゐる。

「アテナ」の意味は intriguer (陰謀を企てる人)、plotter (陰謀者) wire-puller (陰で糸を引く人) などの意味がある。

### 舞草鍛冶と白山信仰

鎮守府將軍、陸奥守に任ぜられた父頼義が安倍氏と戦つた前九年の役(平安時代後期)では安倍氏が滅び、清原氏が東北の覇者となつた。しかし、後三年の役以後は、東北地方に覇を唱えていた清原氏が消滅し、奥州藤原氏が登場することになった。舞草鍛冶集団が最も活躍したのはこの頃であろう。奥州藤原氏が三代で滅びた後は、舞草鍛冶集団は鎌倉や各地に移配させられたと考えられている。この舞草鍛冶が白山信仰(山岳信仰、修験道)とむすびついていたことは、度々論じられて来たので、詳細についてはここではふれない。しかし、そこに至る舞草鍛冶の刀剣制作技術は、突如として出来上がったものではなく、やはり南から徐々に伝わつて来た技術が向上していったとみるべきである。その影には、バルカリアンの影響があつたと推定される。

山岳信仰としての白山信仰は古く、日本の神話が記録される以前にバルカリアン(あるいはスキタイ)が渡来し、言語や神道、星座を元にしたギリシャ神話を先住民族に伝えていたと筆者は考える。バルカリアンは日本中を渡り歩き、各地にその地名(「尻」のつく地名)を残している。神社が大形化したのは後世のことである。

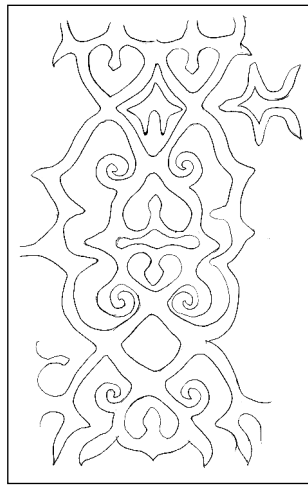
スキタイは紀元前の人間と一般的に考えられているが、筆者は昨年、ハンガリーのブダペストでスキタイの子孫に巡り会つた。このようにスキタイは今も生存しているのである。

今後の課題としては、舞草鍛冶と蛇信仰の関係を調査すべきと

考える。東北地方の皆さんのご協力をぜひお願いして、本稿を終了したい。

### (追記)

ギリシャ考古学博物館で、偶然「神の渦巻き」を撮影した。「神の渦巻き」はアイヌの縫取衣に見られる模様である。これを幾つかのパターンとして谷合浩典氏が筆者に描いてくれたものの中に、驚くほど似通つたパターンがあつたので、ここに掲載しておく。神の渦巻きは韓国にも存在する(ただし、四角で描かれている)。韓国の



アイヌの縫取衣をパターン化したその一つ

古い街並が保存されている所があるが、その家の外壁に描かれている。魔除けの意味があるのかもしれない。バクトリアン、バルカリアン、アイ

など渡来人の関係を示唆しているように思われる。



ギリシャ考古学博物館展示品。名称は不明(筆者撮影)